ゴットルの経済生活と その理論について

長谷川知一

まえがき

学界に大きな足跡をのこした書物や論文を読破することは、私たちの専門の仕事が何であろうと一番身近な仕事との連関性を考えるものである。学説に興味をいだくようになると、こんどはその著者がどのような環境に生まれ、どのような学問の遍歴を経て、あるいは専門分野以外の問題についてどのような考えをもっているだろうか、というように私たちの心をとらえる。

人体については医学があり、精神科学があるべきだというならば、社会について経済学があり、家政学があるべきだと考えられる。現在、日本の社会から医者をなくしてしまったならば大変なことになるに違いないが、家政学者が全部消えてなくなっても、国民の福祉にどの程度マイナスが生ずるかということは、おそらく疑問であろう。〝医者が病気をつくる〟とか〝経済学者の供給が経済学者への需要を生む〟という言葉は真理である。経済学には〝セイの法則〟というものがあって、これは供給が需要を生むということであるが、現在この法則は商売については成り立たないとされている。しかしサムエルソンは商品ではなく経済学者そのものについて、今でもこのセイの法則が妥当すると喝破したのであるが、このことはまがりなりにでも、ともかく、ひとかどの体系的理論をつくりあげて家政学の市場にのりだしたならば、だれかがそれをとりあげて論議の対象とすることによって、一つの討論は、次の討論を繰返すこととなって、いつのまにかその理論は〝家政学説史〟のなかに記録されることになる。

家政学は後進的な学問であるがために、系統的、体系的な研究が少なく、大学制度にとりあげられて、15年以上も過ぎた今日でも雑学とか学問ではないとか評されている。これはわが国だけのことではなく、世界的な問題であって、1959年にアメリカの家政学会に〝家政学の原理と目的に関する委員会〟が設置されたということである。

家政学は社会的歴史的学問であるから、経験科学としての家政学の領域というものを考えたならば、方法論としてゴットルの経済生活理論がうかんでくる。

人間は社会的構成体のうちに生きているばかりでなく、それを通じてそれとともに生きているのである。しかも社会的構成体は、有機体や個人と同様に、それ自ら生けるものであるから家政もこのような社会的構成体において現実的となるものにほかならないからである。

ゴットルもまた、このような立場から社会的構成体を中心として現実態を全面的連関におい

て解明をこころみた経済学者であるが、第2次世界大戦中には〝永遠の経済〟 Ewige Wrtschaft,1943、という著作が公刊されている。

家政学をゴットルの考え方におきかえてみるならば

1. 家政学（家計社会学）をなんらかの意味において綜合家政学と考え、社会的生活ないしは社会的現象全般を研究対象とするものと考えるならば、家政学（家計社会学）は、このような社会的生活の一部面としての社会的経済生活に包含された一部門の研究であって、社会学の固有の構成部分をなすのである。

註、ゴットルは、これと区別された意味での固有の経済学なるものは存在することが許されないとしているが、家計経済をもこの範疇におくと問題が残ることになる。

2. この問題を簡単に現わすと、それは交錯と混乱という一言につきるのであるが、このことは、綜合的社会学概念を去って、家政学は、すなわち特殊的社会科学の一つとしての純正理論社会学の立場にたった家政学の立場を確立することによって整理されるべきである。

このような意味において注目すべき事柄は、いわゆる形式ないしは関係社会学（家計社会学）あるいは結合社会学（家政社会学、註―結合社会学を代表するものに、わが国の高田保馬博士がある）の立場である。

現代はあらゆる意味において転換期であるといわれている。洋の東西を問わず、文化のいずれの領域たるを問わない。人間性自体の変革がおこなわれつつある。新しいアントロポロギー（Anthropologie）が要求される。学問の領域においては、つとに色々とこのような試みが企てられて、抽象から具体的なものへの移行が要求されている。経済倫理の問題が当然にもち上っている。さらにまたアトミックな見方を普通論的な見方でおきかえようとしている。これらすべての問題は相互に一義的な連関がある。これらの概念対は一系列が他の系列に対立する。少くとも対立するものとして要求されている。しかしこれらの系列はあくまで対立するものであろうか。そしてこれらの系列対はそれ自体として完全であるだろうか。例えば、われわれはアトミックな見方の不充分さを痛感するのである。しかしそれだからといって簡単に普遍論的なみかたによっておきかえられるであろうか。社会事象のアトミックなみかたはある程度空虚といえる。が、しかし普遍論的な直観による全体の把握が、経済科学にふさわしいであろうか、経験科学の道具は概念的思惟であるのだから、アトミックなみかたと普遍論的なみかたは第3のより高次なみかたによって止揚される可能性はないであろうか。この可能性を求めたものがゴットルの構体的思惟であると信ずる。

これから紹介しようとする、

1. 経済生活には一群の観念が騒然としている。
2. 機能論的思惟について。
3. 生の理論的思惟の解明について
4. 国民経済学（経済生活）及びその連関について。

5. 前記理論の展望について。

ゴットルの論旨（方法論）はかれの思想をに簡要にまとめたものといえるのである。

註、Wirtschaft als Leben 1925.

経済哲学、Philospphy of political economy.

Wirtschaftsphilosophie オーストリアのシュパン、ドイツのゴットル、わが国では故左右田喜一郎博士、下って高木友三郎博士等があって、左右田博士は、ウィンデルバントやリッケルトなどが歴史的認識または文化科学の論理的性格の批判を行ったのに刺戟されて、貨幣の本質の考察から出発して、経済学的認識の論理的性格の究明に努力したものといわれ経済哲学という学説を明らかにした。これは学的性質、隣接学科との別などの認識論的研究、経済学研究方法の論理的究明から経済生活の理想、他の社会生活との調和などに関して、形而上学的、論理的探求課題を一つの哲学的観点より明らかにしたものである。

ゴットルを位置ずけたものに、Wirtschaft und Technik, 2 Aufl, 1923; Die wrrtschaftluhe Dimension, 1923; などがあげられるが、Wesen und Grund beguffe der Wirtschaft, 1933; （経済の本質と根本概念、西川清治、藤原光治共訳） Volk, Staat. Wirtschaft und Recht,1936; （民族、国家、経済、法律金子弘訳）…訳本が出版されている。

Jean-Baptiste Say,1767-1832. フランスの経済学者。リヨンに生れ、パリに死す。商業教育をうけて、しばらく実務に従ったのち、雑誌記者（文筆生活）に入り、ナポレオンに用いられて法制委員会の財政委員となる。Traité d' économie politigue, 1803. の財政論はナポレオンの圧迫するところとなり、一時紡績工場の経営に従うも、ナポレオン退位後、政府から派遣されてイギリスに遊び、帰国後、経済学の普及につとめ、1830年 Collége de France の正教授に任命されて経済学を講ずる。国富論に傾倒し、アダム・スミスを祖述して、スミス理論の大陸への紹介経済学に現在の体系的な形（生産、分配、消費論）に尽力したといわれる。このことは〝科学のプリンス〟Prince de la Seience と謳われたのであるが、それはスミスの交換価値の概念に効用概念をおきかえ、また、スミスの生産的労働 Productive labour の概念を生産的奉仕 services productifs の概念に脱胎したもので、効用理論、生産用役 services productifs 論に立脚するローザンヌ学派、l'école de Lausanne の先駆として、古典経済学から近代経済学への遊離過程を示すものということができるのであって、かれはまた、販路の理論 Héorie des clébouchés において供給されるすべての財貨は、同時にまた購買手段としての作用を有するものである（部分恐慌説）と説くことによって生産過剰恐慌の理論を否定したのである。このことについては過少消費説批判としては充分であるが、一般恐慌の事実を無視し、また平均利潤率の媒介機構への無理解を示しているのであって、これがいわゆる不均衡概念の最初の提示であり、近代経営学における均衡理論の着想をなさしめたものということができる。

1. 経済生活には一群の観念が騒然としている

人々が〝経済生活〟なる言葉を、ごく普通の談話でこれを口にする場合には、頭に次の如き生々した一群の観念が騒然としているのを覚える。すなわち交通、もろもろの市場における活動、価格の騰貴、貨幣の流通、資本の移動、財産の生成、消滅、銀行の盛衰、商館、工場、船舶業、競争、企業家と労働者との結合、賃金闘争、ストライキ、好景気なるもの、あるいは

停滞、といった観念群がこれである。この言葉は単に総体として、これらすべての観念を結合しているにすぎないようにみえる。さもなければ、ただこの現象全体を包含している運動の漠然とした観念たるにすぎない。少なくとも一般にはこのように通用している。人々はこの言葉を非常に好んで使うのであるが、それを大して熟慮してはいないのである。ゴットルは、これに反して、その言葉を非常に熟考している。まずこの言葉を専門的に真面目に考える。この経済生活なる言葉は、自分が国民経済学とよんでいる学問に対して、まず態度を定めるために直ちに必要とする。国民経済学は周知のように多くの名称をもっているのであるがその名称などは、ちっとも構わない。しかし事実上、それはあらゆる時代、およびあらゆる国民の経済生活に関する経験科学であるように思われる。そしてこの場合には〝経済生活〟をまったく文字通りに考えるべきである。すなわち経済とならんで並行する生活ではなく、むしろ経済自体が生活にとけこむものと考えるのである。従って経済生活とは生としての経済を意味する。

これはさしあたって一つの標語である。ここで直ちに他の標語をいま一つ対立させる。すなわち機能としての経済これである。このことがもっとも重要である。経済に関する二つの異った概念または定義などが問題となるということではない。ここではわれわれの科学の主題と対象に関する二つの根本的見解の間に鋭い対立が存在すること。否、このような対立は、この主題に対する二つの着眼点の間に存するといった方がよいのであって、ここから国民経済学的思惟の根本的二様性もまた、その源をくむものである。一方は機能論的な思惟で、これによっていうならば従来の全理論が担われていたのであり、他は生の理論的思惟であって、この考えを理論のために、まず要求することが、ここで行う科学的信条、告白なのである。勿論この要求は、それが、われわれの科学の経験的部分の思惟方法、すなわち経済の今昔についての事実探求に関する限りなんらの妨げも見出さない。従ってあの要求は、このときすでに実施されてきた思惟法をいうならば理論的意識の領域にまで高めるということに帰するのである。

すでにカールクニースが、これがため、この上なき貴重な基礎行程をかれの主著で行なっている。しかし彼はこの諸国をその後落してしまった。かれの最後の弟子達の一人であるゴットルが、この諸国を再び取上げたのであるが、それは最初には青年らしい性急さをもっておって叙述の形式を全く顧みないものであったので、それは当時では、おそらく未だ時代に適さないものであったのにはちがいないが、全然反響がなかったのであるが、半世紀余を経た今日、この企ては確かに現時の方がよい時代に叶ったものとなって来たのである。

2. 機能論的思惟について

平常経済に関して、機能論的に考えられているところの日常的思惟は常に論理的困難の多い方向の線をおいながらも、それはもっとも平易なもの、もっとも平凡なものに頼っている。〝経済生活〟という皮相的な総体が包括するあの無数の現象は、人がそれをある目的に連関させることによって、経済をある機能と考える時、一番明瞭に統一体としてみられたことになる。

従って経済生活の内容が、日常的思惟に映じている有様は、おそらく毎日のパン、衣服、住居に対して、またはあらゆるかざり、および休日の娯楽に対してさえ、配慮することであるという公式と一致する。その際にこの観念的に考えられた目的に有用な道具がどれほど与えられているかということは問題となっていない。この目的自体がどれだけ多く発展していようとも従って経済のあらゆる形態が、どれだけ繁栄していようとも構ったことではないのであって、常識は経済のあの意味、すなわち機能としての意味をしっかりと固持するのである。この機能が経済を決定するのではなく、それは生としての経済が告知されるところのものにすぎない。ということは日常的思惟の水準では考えられないのである。

さて国民経済学の理論はどうであろう。それをもちろん、一律にとり扱うことは許されないが、しかし経済に関する理論的思惟の答は何であろう。〝欲望充足の配慮〟だとか、〝財貨調達〟だとか、〝手段の二次的領域としての経済〟だとか、〝効用と費用の比較としての経済だとかいうのであるが、これらがお互に非常に相違しているとはいうものの、もれなくそれは〝機能としての経済〟を意味するのである。このような観念では明白に機能の事実上の担当者、すなわち〝財〟が表に押し出される。すでに日常的思惟から、人間はかれが経済という場合、ただちに財貨を考えることを示しうる。理論もまた公然と、あるいは隠然と財貨に即して考える。かくして事実上、ひとえに財貨を考慮して理論的叙述が整えられる。いわゆる〝経済の循環〟とは単に財貨の運命の循環、すなわち財貨の生成流転たるにすぎないから、〝生産、流通分配消費〟の理論なる区分も、われわれの理論の通常の体系の確固たる形式となる。いいかえれば、このようにして事実たる経済生活が、熟語としての〝財貨生活〟となってしまったということである。

財貨論としての国民経済学の体系が、このときにおいて、いかに内容が豊富で、かつ明快な成果をえようとしていつも、ある人々は以前からそこに何か辻褄の合わぬもののあること、学問それ自体にしても何となく不充分であることを感じた。この感情は、どのような結果となったであろう。久しく以前から、すでにわれわれのあらゆる理論の栄冠である〝法則〟を求めなければならないとの要求となった。人間は〝経済の自然法則〟に関する議論をまさに鮮明にしようとする。非常に結構なことである。たとえばあの有名な〝需要供給〟の法則が、それである。政治家、立法家が無器用で、かつ一面的な〝最高価格制度〟およびこれと同様なものをもって思う存分しかも強力にこの法則を犯すなら犯してもよい。しかしながらすべての商人の〝小僧〟はその就職の3日目には、はやくもこの〝法則〟のニュトンになることができる。かれは事柄をたやすくのみこむのであって、この法則なるものは、まったく見易い連関の理念型的解明にすぎない。この連関は徹底的に簡単な公式化となり、何の苦もなく一目瞭然とした形をとって現われてくる。人はより包括的な、より紛糾した連関をますます都合よく解き明かすことができるのであって、これらすべての〝経済の自然法則〟なるものは、このようなものである。これらの法則によって把握されたあらゆる関連は必然的なものであるから、実際生活から

非常に尊ばれるのが当然である。しかしこれは理性の強制であるから行為においても当然に強制的である。かかるが故に、この連関は、まったく洞察しうるものであって、それを洞察することを常に実践が、それ以前にはたそうとする。学問はそれが、この〝法則〟をいくら自慢しようとしても実践のあとからおくればせに行うにすぎない。ここに純粋な自然法則をもって把握され、かつ認識の最高機能の意味における法則として獲得されるので、かの盲目的必然性に対する峻厳な対立が明らかとなる。その例として、落下の法則は何故なら……この故にという公式に従って妥当する。法則が数学的明確さをもって示すところのこの連関に関しては思惟はまったく許されない。人はそれを盲目的にうけ入れねばならないし、その助けをえて、始めてますますより深く思惟することが可能である。自然科学的法則は単に、それ自身として連関のないものを充足理由の律に従って考える、つまり連関を肯定しうる認識手段である。従って法則探求は、おそらく現象、すなわち時突的にのみ整序されるところの、それ自体として連関のない現象の無限の多様性にであう自然科学においてはその認識、目標となるであろう。ということは、自然科学の経験的思惟は、それがわれわれ自身によって体験されたあらゆる体験の連関を捨象する思惟である限りにおいては人工的なものである。しかし、われわれの科学の場合はすでにすべての経験が連関にとんでいる。すべての個々の事実は〝所作件〟として自然科学的事実、すなわち〝所与件〟とは反対に連関にみちている。なぜならばわれわれの経験的思惟は経験的現実体つまり、直観的に体験されたものを自身で体験した連関と同様に把握する。すなわち、もっとも簡単な形で意欲にそい、可能を通じて実現に組み合わされるあの連関の場合と同様に把握するからである。これに対して日常の生は簡単に、これこれの物は、かくかくの事情のもとに〝意欲〟されたのであるから、それはこうであって異ったようにはならないという表現法を用いる。この全事態に対する通常の理論的表現法は、次のごとくなる。われわれは、われわれの科学において〝有意味〟の現象、すなわち理解しうる現象をとり扱うべきであると。かくして国民経済学も本当に連関をこととする。従っていわゆる〝法則〟とは単なる思惟命令の種類にすぎない。国民経済学の理論を故意に自然法則というあの連関の代用物たらしめようとすることは、人が魚の遊泳路を正すことができると信ずる類に等しいだろう。

国民経済学の理論は数学的な形式の精密理論によって純粋化されねばならぬとの要求は、まったく似たり寄ったりのものであって、総合ということは科学において常に立派にみえる。われわれがそれを理解しない場合にはことさらである。しかし経済生活が価格およびその類似物によって、いかにすぐれて数的であるとはいうものの、このことはただ皮相的な外見上そこから数学的な意味における計算可能性が生ずるにすぎない。すべてが連関に融けこむところには根本的に数学的函数関係の最深な前提、すなわち量の要素である単位のみによる独特な無連関性ということはありえない。しかしそれ自体としてこの論理的暴行は、われわれがある魚の鰭をさらに縮めてやろうとすることと同様に不適当である。1891年にアドルフエックスナーは〝政治的教養〟に関するかれのあの素晴しい総長講演においてすでに次の如く喝破したのであ

る。自然科学的思惟方法に精神が偏執していることは世紀の旧弊であると。この旧弊については多くの同僚専門家達に今日なお自然科学の形式に寸分違わぬ方法という意味でくっついている。私は上り高い科学性へのあの衝動をよく理解する。しかしその道はおそらく思惟の自己反省を契起として開けるものであって、無邪気な自己欺瞞を契起としているのではない。

機能としての経済にもとずくあの一般的なみかたもまた間違っているのであろうか。それは素朴であって芽生えている端緒である。従ってこの観念の地盤に生い立つすべてのものが間違っているのではない。あらゆる理論の転覆ではなく、その純粋化と深化が大切である。このようにのべてきた理論の目的は何であろう。経験を統一して最後まで考えぬくことである。あらゆる経験はたしかにすでに思惟されたものである。あらゆる事実は〝所作件〟たると〝所与件〟たるとにかまうことなく、すでに体験の思惟結果である。従ってすでに経験的な探求、事実の探求も認識の精神的な糸と結びついている。しかしながら理論はこの糸を統一的に総括して経験から概念的全連関をつくりだすのである。われわれの場合には理論が体験の全連関を概念的に模造するといった方が一層正しいだろう。これこそここでは明らかに最後の認識目標であって〝法則の探求〟の無意識的な喜劇ではない。われわれに従来の財貨論もこのような連関を提供するであろうか。勿論である。〝経済の循環〟は明らかにそれに外ならない。しかし〝間道〟を通ってえられたということが異るのみである。機能論的なこれらの体系の思惟はそれに先立ってすでに日常的思惟が機能論的に考えていたものを継続するにすぎない。従ってここでは科学的思惟は前科学的思惟の後塵を拝している。このようなもっとも素朴な思惟さえ、すでに認識の主題に対する根本的な見方を決定する。なぜならばすでにその助けによって日常的思惟がいい現わされるあのことば……〝経済〟〝欲望〟〝財貨〟〝価値〟〝価格〟〝財産〟〝資本〟〝利子〟〝地代〟等……これらのことばを人々は、まず〝国民経済の根本概念〟であるとみなして、これに従ってそれを論ずるからである。しかしこのことはなんと馬鹿げた結果を生むことになるであろう。理論がその先の問題をいかに良心的に正しく考えるとしても、まさにそれははっきりとその根本問題の一部分に関して日常的思惟にとどまっている……。しかもそれを知らない。このことはもっともひどいことである。続いて若干のことば通りの問題つまり〝経済とは何か〟〝価値とは何か〟〝資本とは何か〟……等々の問題が生ずる。われわれの科学の理論におけることばの支配は実はこれにもとずいている。この理論はあまりにも字義にこだわった問題の上に組み立てられる。単なることばが究極の問題を占める。人々はこの問題を根本問題からさらに意識的に展開するすべを知らなかった。このようにこの盲目的でかつ硬化した死せる問題が、まったく前科学的問題、すなわち日常的思惟の問題の面にも存在する。

このことは間違ってはいない。出発点としてこのようなことは、ぜひ必要でさえあった。なぜならば、いかにどこから始められても、ここでは実際上日常的思惟より科学に入るよい方法がなかったからである。われわれの科学が精神的に克服しなければならない。すべてのことがすでに多かれ少なかれ日常的思惟に知られている。人が、単に若干の根本的概念を通じてさら

に深くすべての連関に突き進もうとする場合に、単純に自明なものから内的な密接さを求めているにすぎない。そこでそれも立ちどまる。なぜならば、このことばの規準には、いまの理論は5月頃に甲虫がいたずら好きな子供の糸につるされているがごとく、やるせなくかじりついている状態といえる。しかしながら学問とはこの場合には、既知のものの認識という意味である。これは日常的思惟の素朴性からの意識的、かつ徹底的転換、問題のより深遠で生により近い面への突進を意味する。かくのごとくして機能としての経済にもとずく観点から、生としての経済にもとずく観点への転換が要求されたところの転換にほかならない。

3. 生の理論的思惟の解明について

なにが故に一体、生により近いというだけなのだろう。というのは、生とはそれが湧き出るその汲みつきないところの深奥においては非常に気ままなもので、詩人にして始めて近ずきうるからである。がこれに反して専問科学には、常に連関的で体系的に概念する思惟という冷やかな道具が用いえられるにすぎない。仕ごとについて、いざというときそれが体験された生を連関ずけて考え、それを加工して統一をつけようとした場合において、ただちにあの道具の弱点が現われる。専門科学は、そこでは常に無成果に終らざるをえない。しかしどうしても根本的には及びえないとしても、やはり科学の完成はそれにかかっている。

いかなる種類の生を国民経済学及びこれに類する学問が問題とするのであろうか。それは間接にのみ、あらゆる生の原形、すなわち個人的生、自己肯定的な生を取り扱うにすぎない。それは決して〝有機的〟な生を問題とすることはできない。これは現象界のまんなかにおけるナゾのごとき錯綜であって、その中で生物学は社会的な概念社会からまさに精神的なかりものをすることによってある程度の仕ごとを進めているにすぎない。国民経済学は直接にわれわれすべてが生きものとして生き物の中に現存するあの第3次の、いうならば体験された生に当面するのである。従ってわれわれが他におのれを認めるがごとき様式は作用的な統一体、すなわち体験された生起の結接点において体験されたそれが全連関の編物の中に、丁度われわれ自身と同じように現存するのだと認めることなのである。しかし経験の領域を国民経済学はさらに姉妹科学、そしてまた歴史科学とも分つのである。人はこの純粋な経験科学の群を〝生の科学〟として総括することができるだろう。しかしながらそうすると自然科学という鋭く対立した陣営にある生物学と不快に正に一脈を通ずるようである。自然の諸科学にはわれわれからはいかなる関係もないのである。なぜならば、自然科学は、〝経験的現実体〟という記念碑の裏側をみるにとどまるのであるから、いうならば彼岸の経験にもとずいているといえるのである。従ってわれわれの科学を運命科学として総括した方がよりよく意味を表わすこととなるのであるが、このことはその共通の経験界、すなわち体験された生の全体を運命の世界と称する方がよりよく意味を表わすからなのである。このことは自然科学の自然に対するところの対立物であろう……。〝森や野原の兄弟〟によって感動されている詩人のいう〝自然〟と混同されてはな

らないのであって、ここには詩的にまさに純化された運命界が存在するにすぎないのである。従ってわれわれはいうならば〝現実体〟という記念碑の表側をみるのである。あるいはもっと内容的にいうならば、経験の根本的に違った二つの道は、直観的に体験されたものの常に一つにして分けえられない現実体に導くことと、自己反省の意味における専門科学の認識批判的な基礎ずけはこれ以上おこなう必要性がないということである。

さて一体、生とは何か。答はおそらく比喩の国へ逃れるだろう。独自の源泉をもつ流れあるいは絶えざる流転の真中における休止物といった像が浮びあがってくるのであって、このことを解答としたところで専門科学にはちっとも役立たないのである。

生が何で〝ある〟かということには少しもかまわないで、専門科学はその体系的に概念するところの思惟自体がたまたま〝生〟に近ずいているか、あるいはまたどうしてそうなのかということを知ろうとするにすぎない。私（ゴットル）は単純にあらゆる生の経験的根本概念を思い出しているだけであって、統一、作用および持続が共存するところに生は存ずると信ずる。作用と持続はお互いに組み合わさって統一体となり、持続は作用がそれを担っていると同じように作用を担っている。従って作用的統一体がいうならば内面的に獲得された存続の作用的統一体として、その存在を自発的に固持するところに生があるのである。生物、すなわち生物学的有機体の場合がそうである。もっと正しくいうならば、このような観念によってのみ、私（ゴットル）はこの錯綜をかろうじてようやく片付ける。同じ観念は個人的生にも、その深奥へ概念的思惟が届く限り矛盾するものではない。しかしこの観念には〝構成体〟として解明、後述しようとする運命界のあの生の現実体が完全に映じているのである。

あらゆる生のより狭義の根本概念は正に〝持続〟である。何人かがそれをけっとばさない限りにおいてはいつまでも同じ場所にとどまり、なにものかがそれを打ち砕かない限りそのままの姿で存続するところの路傍の石の場合におけるような、あの無感覚な持続ではないのであって、活動的であって、また活動的に頑張る持続なのである。獲得された持続と作用の持続とを同時に表わす程、作用を密接に編み合わされた持続である。このような持続がどこかにあてはまるところがあるとすれば、それが生にあてはまるのであって、この生を意味する持続は簡単に自覚的持続と名付けられるべきである。

さてわれわれはもっとも簡単であり、かつ平凡な例をあげて説明を助けた方がよいだろう。そのことは現代における営利企業がよい例である。従って銀行とか商店、あるいは工業とか船舶業、またはこれらに似たものをえらんだら差支えないことであるが、利潤追求を、私（ゴットル）は企業精神とよんでいる。事実上、ここでは理念型的に観察された〝統轄者〟が構成体を支持して〝利得欲〟として働いている。私（ゴットル）はただ単にこの欲求を直ちに自己措定であると考えて、企業はすべて当該機能のみを考えることが許されないと考えた。

企業はむしろこのことによっても収益の源泉という意味において作用的統一体たることが明らかである。しかしながらそれは労働者および雇傭者にとって、また他方において供給者およ

び債権者にとって、個人的なる収益の源泉という意味においても統一体である。とくに企業の側から生産が行われ、あるいは交換、信用または交通が媒介される限り生計の源泉という意味からもいえることである。さてそうとすれば、どこから作用的な統一体としての企業の持続が生ずるのであろうか。われわれの新ローマン主義者は目的指定の反覆から、つまり多分絶えずくり返えし収益が追求されることから生れるというだろう。いわゆる〝清算〟あるいは〝廃業〟における収益追求はその企業に関する限りは消滅しておるから、それと同時に企業もそうだという限りにおいてはこのことは正しいのである。

〝統轄者〟すなわち生起自体に含まれている生起の〝持続的〟基礎条件と同時に生起も中絶されることは理の当然であり理解できるところである。このほかなお企業で満される多くの欲求のすべて…例えば賃金および月給の欲求あるいは需要に表現されるところの生計の欲求…これらすべての欲求が企業と結びついていうならば持続欲として現われることもまた正しいことである。しかしながらたとえば廃業が心意から起る前に、企業はそれまで実際にただ目標措定の繰返しによってのみ維持されたのであろうか。破産の場合にたとえたならばそのときにおいて企業が利得欲を繰返えさないことによって瓦解したのではないのであって、むしろ逆に瓦解の結果によって反覆が中絶したのである。従って繰返しの地盤がこの場合には何らかの作用によってなくなっていたのである。反覆およびあらゆるその他の目的措定の地盤が奪われたのである。対照的な一例をとりあげてみよう。空腹はすでに餓死した人には再び起らない。そのときにはただ単に絶えざる飽満が入れ代るだけである。従って空腹およびその目標措定すなわち食物に対する欲求の正しい繰返しは、この場合生計がなんらかの仕方で保証されている限りにおいてのみ現われるのであるから、目標措定自体が、さらに何か他のものに基礎ずけられていなければならない。目的措定の繰返しのみが、すでに企業の存続を保証するのではないのであって、むしろ機能と同時に目的措定が繰返えされるための保証がなんらかの作用で与えられていなければならないのである。この保証を与えるものは何だろう。構成作用がそれである。しかしながら単なる機能の構成作用ではなくて、単に機能の統一を目指す多種多様に〝適応した〟諸現象の並列ではないのであって、生にとけこんだ構成でなければならない。すなわちそれと連関するあらゆる生起の持続と存続えの統合としての構成でなければならない。ここで持続するものはよりせまい意味で繰返しを保証された生起である。ここにいう〝存続〟するものとは、あの保証を基礎にして形成された統一体なのである。あの統合からはじめて生れたところの構成体、この場合においては従って企業ということである。このような意味において企業は内面的に獲得された存続の作用的統一体である。よってこの構成体はすでに生の一片として、たとえば深さからいうならば非常に皮相的な生であるというものの、ともかく生の現実体として現われる。しかしながらここで注意しなければならない。この場合における支配的統合は持続の統合ではないのであって、まだ持続的統合でもなく、逆にそれは自分の欲するものにとどまろうとするがために、間断なく変化しなければならないということであって、持続と存続え

の統合、すなわち生を創造する統合である。私（ゴットル）は故意にじんこうにかいしや（膾）した〝有機体〟なる表現をさけた。それは平常は連合のみを意味するかあるいは並列または多くの活動が機能の統一を目指して組み合うという意味における協同のみを意味するのか、あるいはまた戦時経済的なそして空論めたい社会主義的な意味における集中のみを意味するのである。従ってこの表現は実際は全く一面的な意味にわれるからあの深い意味に対してはまったく適しないことである。

この持続と存続への統合ということは、いうならば、まず企業にとけこんで動くあのあらゆる諸過程、すなわち指導と管理、購入と販売および信用、生産収益の分配、投資等の正しい調和というものをすでに内包するのである。異った内容をもったこれらすべての諸過程が成果をあげるためには技術的に正しく組み合わされなければならない。そしてそれらは相互に妨げ合うことなく、むしろ諸過程の〝正しい進行〟の形式という意味で交互に促進しあわなければならない。すべてのものが続行されるように遂行されていくことであろう。これがためには諸過程が全面的に相互に要求しあわなければならない。

この主要な関係に対して次の如き事態は、まったく粗雑ではあるが一例を示してくれている。工業的企業の内部であらゆる生産必需品の購入は生産を可能にし、生産は生産物の販売を販売はまたさらに収益の追求と、さらにいま一度の購入の諸過程を可能にする。一つのものは他のものから、その動機をくむ。そして各々はあらゆるものの共同によって意味を獲得していく。この一例はこの事態を非常に皮相的に解明するにすぎないが、私（ゴットル）はすでに、ここにおいて封鎖的に循環が行われているのを見出している。常にそして到る処でこのような結果を生ずるのである。しかしながら諸過程の内部におけるこのような共働には、第2に循環との共働が伴わなければならない。この場合においてもまた、あらゆる諸過程は内部において、種類と共働に即して環境における存在と生起とに促進的に調和合されなければならない、常に持続の保証という点で促進的でなければならない。このことはまたこの環境への適当な働きかけを意味するのであって、例えば企業はその市場に順応しようとするばかりではなく、それはまた市場をそれ自身に順応するように開拓する。従って私（ゴットル）は、この第2の要素を全体として構成体のその環境への〝順応〟と名付けうるのである。構成体におけるあらゆる過程は共働して生起の生きた循環を進めるが、それは一挙に爆発のように遂行されるのではない。構成作用はもちろん、すでにこのような繰返す諸過程がいうならば固定しているのであって、持続の形式をとると共に、それが始まるのである。例えば物の消尽は重り合ってその物の〝貯蔵〟の中止となるのであって、手段の使用は〝資本〟の組織を基礎ずけるのである。このようにして諸々の個人的給付労働、あるいは一定の職務をもつ働きはおのおのが構成体内で〝勤務〟として固定化されるのであって、同種の勤務はなんらかの仕方で、その成員によってみたされる構成体の〝地位〟をうるのである。これらのあらゆる種類の準備は自らすでに部分構成体に変化するのである。〝経営〟の大抵の形式、すなわちある一定の過程は……決して生

産のみではない……徹底的に完備された準備のもとに繰返しを保証されて遂行されるのである。このような構成要素から始めて……企業の場合は管理、購入部、作業、販売、および宣伝部、簿記および同様なもの……構成体自身が形成される。従ってそれら自身、形のないものもやはりわれわれの精神的な眼には物体的なものとして現われる。この構成体の肢体構造には、それによって構成体がたえず給水されるところのあらゆる生起の結合性が非常にはっきりと映ずるのであり、構成体はかくしてまったく独特なものとして、換言するならば、諸々の仕組の〝円環的〟な配置として現われる。活動的に獲得された作用体の持続は、従って〝構成体的に保証された持続〟という結果になるのである。このより鋭い意味で企業という構成体は生の存在形式の性質をおびるから、この生を担う保証がよりしっかりと構成されればされるほど、ますます企業は生命力ある生の現実体となる。われわれは企業のこのような生命力の強さをその繁栄と称するのであるが、ここで企業を例にしてくわしく吟味されたことは、あらゆる経済構成体、すなわち家計から国民経済および世界経済に至るまであてはまる。国家、国民、大学および教会に対してもこのような生の現実体の全系列を通じてあまねくあてはまるのであるが、いたるところにおいて円環、共働、および適応が企業という簡単な目的構成体の場合とは比較にならないほど複雑であるということが異るだけである。

生の理論的思惟は構成体を常に構成体的に保証された持続の作用的統一体として把握するがそこにはいかなる未解決の残骸も残らない……のであって、このような構成体は生の存在形式である性質をおびる。しかしこのことはあくまで洞見されうるということであって観念的に開陳される。その実際的解明が学問には時としてどんなに困難であり、構成体自体がまたはその相互の結び合いが複雑であるがごとくに複雑であっても、いかなる場合も決してここでは概念的思惟が根本的な困難ともいうべき、有機的生におけるようなぞあるいは個人的生におけるような深淵にであうということはありえない。生の理論的思惟はまさに構成体それ自体を生の現実体としてとらえるのであって、本質に徹するこのような把握は機能的思惟がたしかに余儀なく服していたといえるところのもろもろの危険をとびこすのである。機能論的思惟は実に構成体から常に目的と機能との関係のみをとりだすので、それは単に皮相的な数量問題にがじりついていない場合でもたかだか機能的な構成を把握するにすぎない。このような思惟も構成体をまったく無視することはできない。がしかし、それは構成体をただ単に〝個人主義的〟に個人から発するところの関係秩序というものや、その結合などと考えてそれを組み立てるにすぎないか、あるいはこのような思惟は人間の共働生活を神秘的な全体から起因して個人に向うのだというように〝普遍論的〟に解明するのである。これに反して生の理論的思惟は、問題を意識した〝構成体中心の思惟〟として、内容ぬきに組み立てられたところの〝個体論〟と同時に〝普遍論〟の浅薄な形而上学的な誇張をさけることができるのであるから、常に外見上からは人間の共働生活に関するわれわれの思惟の絶対的二者択一が存在するようにみえるにすぎないのである。従って機能論的思惟には、このような素朴な思惟が人間の共働生活を把握しようと

すると2つの窮余の逃げ道をよぎなく選択しなければならない。その際にそれ独自の仕方によって生自体を逸することになる。成熟したところの思惟、つまり構成体中心の思惟にとっては〝全体性〟のどのような狂信もなんら役割を果さない。このような生の理論的思惟はまた完全にいわゆる〝有機体説〟をも否定するのである。なぜならば人間の共働生活に関する思惟がその負債者である生物学的思惟からあの負債によって生じた概念や合理をいうならば〝有機体的比喩〟という形式によって再び返却してもらうということは考えてみるだけでも喜劇だからである。運命社会の構成体は有機体でもなければ、ナゾを含む生物でもなく、より高いものでもそれ以外のものでもないのであって、また同様にメカニズムのような単なる組み立てものでもなく、単なる機能的な構成でもない。それは純粋な生の一片であって、しかも明瞭に洞見されうるという意味において構成体的に保証された持続である。

体験された生の総体としての運命世界はまったくこのような構成体によってみたされているのであるが、この構成体の背後にはさらに個人的な生の豊饒が湧き出ているのであって、ここで常に留意すべきことは、構成体の肢体構造内の異った諸地位が成員によってどのようにみたされているかということである。たとえば企業の框内でもっとも重要な勤務は共同的に〝企業家の地位〟を務めるが、これは単独でみたしても、それ自体すでに構成的に完成された成員の一因がみたしたとしても差支えないことである。すべてのその地位、数多い屢々たる地位に対するこのような充当についていうところの個人的な生は構成体に口を注ぐというべきであってこのことは逆に構成体を境にして完全に洞見することのできる体験された生というものは、常に必ず個人的な生の底知れない深淵におちこむということである。いずれにしても生の理論的思惟には常にすべての人が眼界に入るのであって、単なるあやつり人形とか、単なる経済人とかビジネスマンとか、営利の傀儡が問題となるということではないが、成員としての個人はただ円周的に眼界に入るにすぎない。なぜならば構成体は観点においては構成体たることを失うからである。社会科学が個人的生をとり扱う範囲はただわれわれの各々が共同生活自体において自ら体験したものにすぎないのであるから、われわれの科学の主題の表現も〝体験された生〟である。その背後にはまさに自己肯定的というべき生の本来の領域がかくれているのである。

運命世界のこのような生の現実体、すなわち構成体は、単に個人的生と上下に交叉するだけではないのであって、それはさらに入りまじって相互に交錯しまた相互に多種多様にかばいあっている。このことによってもまた分解されにくい錯綜が編みこまれるのである。運命世界は単に関係にとむ構成体の並存を示すばかりではなく、多種多様の共存および包括被包括を示すのである。包括された構成体は……私（ゴットル）はそれを〝内包構成体〟とよぶ……包括する構成体すなわち〝包括構成体〟に包みこまれる。たとえば内包構成体としての企業は、コンツエルンあるいはカルテルに包括されて、同時にその部門に編入される。それは後者と共に国民経済の全産業躯体に、そしてさらに国民経済自身にあたかも国民経済が多種多様に世界経済

的包括構成体に組み合わされるがごとく編成される。このような被包性のあらゆる段階においてさらに同段階の構成体間の連関が、たとえば内外諸企業に対する企業の〝取引先〟としてあちこちに拡がる。そしてここにもさらに独自の生命たる構成体が表現される。内包構成体としてそれはまた包括構成体と共存するところのすべての生に関与するのであっらて、ここから構成体内の生起の生きた循環がいうならば輪状形を描きながら包括構成体まで拡がっていくということで、このようにしてその包括構成体は内包構成体にその被包性によってほとんどそのすべてが運命と繁栄の基になるのであるが、逆にまた包括構成体はいうならばその内包構成体から養分をえているということである。このようなすべての錯綜の進行中に人間の共同生活は生との交互作用として建設される……構成体と成員との交互作用として、その中には原則的に運命世界の全体が潜んでおるので、後者の中にはまたいうならば太陽、月、星を入れたところの全現実体が潜んでいるのである。私（ゴットル）が手引語として……〝社会〟〝経済〟〝国家〟〝宗教〟〝芸術〟等々……の指図に従って思い浮べる現実の領域と称するこれらのすべてのものは、勿論現実をのぞきこんだというだけのものにすぎない。のぞきこむたびごとに簡単に現実体が種々の視角から観照されて、常に異った総体がたえずそれからとり出されるのであるが一面的な観照法の結果としては、われわれの思惟の産物にすぎないものを、いうならば現実にわれわれが投げ返えすことによってその領域をみたと信ずるのである。従って素朴な思惟は常にこの領域に独特であるところの〝標識〟の探索にふける。まったく同じようにたとえば〝経済的行為の標識〟が探求されて、そこから経済生活が原子論的に組み立てられると信ずるのである。同様にたとえば〝人間と人間との諸関係〟が〝社会〟を構成するというのであって、常に人はこの〝領域〟を概念の実在的に現実体から切りとるということを真面目に考える。実際上運命の世界自体は、一定の一面的観察法があの構成体をわれわれの眼前にとりだしてみせるならば、簡単に人間の共同生活としてわれわれに対する。構成体およびその相互の交互作用ならびに個人的生との交互作用は、このような場合、たた単に経験された永遠に更新する流れによってその周辺を洗われ、かつ担われているにすぎないのである。ということはそれを人間の共同生活としてみるのと同じようにわれわれはこれと異った観方をする場合は運命世界全体をあの永遠に更生するところの生起の流れとして、すなわち歴史として統一的にみることができるからである。かくしてこの場合は構成体の事実における循環、共働および適応は背後にかくされる。否たいていの構成体が単なる限定的な役割に引き下げられるのである。

註　西田幾太郎博士門下のすぐれた哲学者であるといわれることが、その経歴や業績のためばかりでなく座右の銘に〝応無所住而生其心〟（まさに住する所なくしてその心を生ずべし）〝金剛経〟…の一節で〝ひとつのものにとらわれて自由な働きを失わないように〟という意味であると説き、また学生に説くに〝平凡であっても世の中のためになる人たれ、人類の意識をもて〟という谷川徹三博士の説をあげるならば。〝核兵器の出現によって人類は運命共同体になった。いまほど人類の連帯感が切実に求められている時代はないと思う。私はこのために世界連邦論者となった〟…弁証法…核兵器というマイナス要因を最大

値にまで高めたところで人類の平和のためのプラスの要因に転化させる論旨。

〝このような理想論は最近とくに国家エゴイズムであって、外交はマキャベリズムの場であり、政治は現実に目を向けなければならない。

〝日本のナショナリズムを再認識しようという風潮には、〝政治がナショナル・インタレスト（国家的利益）を考えることも結構、しかしナショナル・インタレストで考えたことが果してナショナル・インタレスになっているかどうか。大平洋戦争にしても、そのナショナル・インタレストから始めたことと思うがその結果はどうか…〝考えかたや説き方はいろいろあるものである。

4. 国民経済学（経済生活）および連関について

生の理論的思惟すなわち構成体中心の思惟は国民経済学とどのような関係があるのだろうか。私（ゴットル）の例示は幸にも国民経済学との連絡を保ちながらも空想の国へ遍歴するが如き印象を防いだのであって、いかにしてわれわれが構成体中心の思惟に実際上四路を開きうるかということについては事実、探求が教示する。少くとも、その内容がわれわれをしてそこへ回わしめるように心の奥底から魅するところのもっとも完成した事実探求の成果はわれわれにそれを教えるのである。しかしながら生としての経済にもとずく観点に導くものは…これと共に構成体中心の思惟が始まる…さらにはわれわれの専門科学の認識批判的な自己反省である。なぜならば、それは粗雑に解されているからこの学科の認識素材と認識目標を教示するばかりではなくてその根本問題までも解明するに役立つ。かくしてあの観点はこの内容えと直接に導いていく。このことを明らかにしてみよう。私（ゴットル）は国民経済学的思惟の認識批判的な自己反省の際に展開される厳密にして体系的な思惟過程から最後の成果のみをただ単にとりだすことにする。必然的なそれからの帰結自体はこれを私（ゴットル）は留保しなければならない。これはあまりに広範になりすぎることだろう。この最後の帰結がまさに非常に明白なものであることは好都合なことである。

国民経済学の根本問題とはいかなるものであろうか。それは二つの観念に担われているものであるから既成の自己反省の状態の下ではわれわれの専門的思惟の正しい根本観念として自慢しているものである。その一つについてはすでにもっとも必要な事柄をのべた。それはあの人間の共同生活の構成体の観念であって、これと共にわれわれの専門科学的思惟はすでに生の理論にならざるをえないのである。もう一つの根本観念はいうならば経済の内容をみたす〝欲求と調達との作用〟である。これも私（ゴットル）には単なる言葉としてはうけとれない。この言葉というものは日常から思惟の規準としてとりあげられた結果として、思惟が言葉の指示に従っていたのである。これもまた日常の言葉とは無関係に獲得された公理に対する言語の性質上不可避な名称であるにすぎないのであって、結局ここで基礎となるのはあらゆる人間の共同生活の根本事態の一つ、すなわち私（ゴットル）が生の困窮と名付けたあの事態の洞察である。あらゆる意欲はそれ自体として無制限であるにもかかわらず、あらゆる可能は常に制限さ

れていることから根本的な矛盾が与えられる。この事態はすでに実践的な行為に熟慮を要求する。私（ゴットル）はそれを簡単に〝経済的・実用的〟な熟慮とよんで差支えないと思っている。なぜならば、その意味は明白に内容が単に欲求と調達という言葉のみで再現されうるからである。すなわち正しい言葉使いの必然からなのである。可能の条件を支配しようとするところの意欲自体から培われた要求は単に〝欲求〟とよばれることが言語上は正しい。その充足、従って支配の実現はただ単なる〝欲求の調達〟とよばれるべきである。目的と手段に即した〝技術的・実用的〟な熟慮は、その対照をなすのであって、技術的・実用的に重要なのは対象の有用性であって、経済的・実用的に重用なのはその支配性である。常にこのことが重要である。一方さらには目的と手段、他方欲求と調達なるこの両対の概念はあらゆる因果性の中で、もっとも深く、もっとも知的満足を与えるもの、すなわち運命科学的因果性の一面を現わす思惟形式として役立つのである。この因果性がいかに体験された生起の〝統轄〟と〝限定〟との間を種々様々に展開しながら右往左往するかを私（ゴットル）はまったく論外におかなければならない。われわれの専門的思惟の無数の概念対が欲求と調達の対立に帰着される。つまり消費者と生産者、需要と供給、債務者と債権者がそれである。われわれがさらに例外なく体験された生の連関を解明しようとして、とくに好んで〝目的と手段〟の思惟形式を使うことはゆるさるべきである。従ってわれわれは単純に実践的な行為者を技術的な考慮者とみて粗雑に考え続けるのである。しかしわれわれがあらゆる因果性の中のもっとも深いものであってたいして役にも立たない思惟形式を因果性に対立した意味のいわゆる〝目的論〟としてかかげることによって、運命世界の合言葉にしようとするがごときことは決してゆるされない。それははなはだしい行きすぎということができる。われわれが情けない運命世界を〝価値の世界〟として特徴ずけることによって、それをすべての訓練のない思惟の特徴にすぎないこの誤った言葉のほんろうに任かすことはなおさら無理なことである。わが国民経済学においていろいろな種類の価値が横行しはじめた。われわれは現代の哲学者を残らずそれに感せんせしめた。われわれはそれを片付けはじめている。あるものは経験的に他のものは理論的に片付けている。しかしこのことについてはその原因に少々ふれておくだけにとどめよう。

さてあの根本観念はいかにしてわれわれの根本問題に結ばれるのであろうか。ここで認識批判的思惟過程をざっと略説しなければない。まずあらゆる社会科学は、それが自覚的持続の問題を解決するという点に一致するのである。それらは等しく運命世界に次のような問をもって近かよっていくのである。どうして人間の共同生活が構成体的に保証された持続の作用的統一体間の交互作用という意味で構成されるのであろうか、ということである。ここで3つの科学が明白にこの問題を解決しようとする。ということは明白に同じように社会的生の構成が実際的にも3つの異った観点で行われているからである。すなわち生の和合、生の不和、生の困窮がそれである。従ってこの構成は概念的に3つの部分構成に分解される。個々の専門科学は常にこれらの一つ一つにのみ……ある一定の一面的精神における構成にのみたずさわるのであっ

てこのような不可避の一面性においてのみ、専門科学は人間の共同生活をあたかも、精神的に概念的な全連関へ移したように克服しうるのであって、その〝論証的〟な性質が故に、概念的思惟は常に終始一貫しようとするかぎりにおいて、一兎を追うことができるにすぎないのである。

国民経済学の外に、いかにしてまず政治社会的なものに関する姉妹科学が可能であるかということについてはここでは論じない。それはあらゆる〝集団〟およびその生成消滅を…強制と自由との持続的な調和という精神におけるあらゆる構成を人間の共同生活からとりだして明瞭ならしめることである。この他になお第3の科学が課題として生れるが、それは特殊社会的なものに関する科学であっておそらく、もっとも深い意味における〝社会学〟というものであろう。これはあらゆる〝共同社会〟すなわち内面的な同感という精神におけるところのあらゆる構成を対象とするのである。さらにはこの3つの姉妹科学がいかにして同一の体験的な生を常に異るように観察するかということはここでは論じない。かくしてたとえばあらゆる他の構成体を上下に担っている運命の世界というもっとも生命力のある唯一無二の構成体が現われるのであって、最初の部門は〝民族〟として次ぎの部門は〝国家〟として第3番目には〝国民経済〟として現われる。このために私（ゴットル）は常に青・白・赤の模様のあるジュウタンの比喩を用いるのであって姉妹の一人はこれからあらゆる白を、他の一人はあらゆる赤を、第3の者はあらゆる青を、相連関する模様としてとりだしてみるのであるが、各々の場合における残余の模様はそれと連関のない単なる背景となるのである。

これらのすべてを省略しよう。省略しても人間の共同生活のどのような部分構成を〝経済社会的なものの〟科学としての経済学が一面的に目指すかということは自明なことがらである。〝欲求と調達との持続的調和〟という精神において生ずる構成にほかならない。ということはかくのごとき調和をうることによってのみ、構成過程において生の困窮に耐えうるが故である。この困窮の原因は原則的に欲求と調達との永遠な不和である……機能論的にみるならば、いわゆる〝財の稀少性〟がこれである。この不和は常に困窮のあまり闘争におち入り、さらに闘争のあまりに困窮となる傾向を持つものである。しかしながらこの構成にもっぱら最高の欲求調達を追求するようにと要求することは不可能なことである。なぜならば欲求は究極において常に調達より力強いからである。それらの間における持続的な調和の公式は最高なる調達促進を意味するのと同時に調達ができる程度にあの欲求の制限をすることである。

このようにのべ、説いてくると国民経済学の根本的問題はまったく平明になる。すなわち究極的に運命の世界に、〝如何にして欲求と調達との持続的調和の精神における人間の共同生活が構成されるか〟と質問されるならば、私（ゴットル）は生の理論的に国民経済を考える。究極的に…各々の場合の問題の提起は常に諸問題の誘導の過程において、あの根本問題から導き出されなければならない。この根本問題については次のような定義的な公式におきかえられる。生としての経済は欲求と調達との持続的な調和の精神における人間の共同生活の構成であ

ること。これはわれわれの科学のより狭義な主題…もしなんならその〝認識対象〟といってもよいが…をなすある事実に関するもっとも短かくしかも単なる〝標識〟というものではなく本質を把握する述語にほかならない。この事実はきりとられたものではなく、ただ根本問題の視角からとりだしてみられているにすぎないのである。直接には共同生活から、間接には運命世界から、究極においては、経験的な現実体からとりだしてみられているものである。一面的にのみ観察されたこの事実に対して、さらに太陽、月および星をふくめての全現実体がひそむのである。あるいはもしかすると光と熱を与える太陽があらゆる経済的連関にもっとも重要なことではないだろうか。勿論自然科学的な世界像の構造における遊星の中心としてではなく体験された生起のもっとも強力なる限定者であるという意味においてはそうなのである。さてあの事実に〝経済生活〟なる名称を言語の必要性から附してもいっこうに構わない。なぜならばそれは欲求と調達との作用をその内容としているからである。同様にそれは慢然と短く〝経済〟とよばれうるようにみえる。従って〝経済なる根本概念〟の定義のみが存するあのような外観を呈するのであるが、しかしここではまさに定理が前述の言葉に近寄ったのではなく、公然たると隠然たるとにせよ言葉の上から定義的に搾りとられたのではない。逆に認識批判的にかつ問題を意識して獲得された定理に、おくればせながらこの言葉が言語の性質上必然的であるとはいうものの、単なる名称として止むをえなくなったまでのことである。このことは方法的な点でいかに生の理論的な思惟が〝訓練された〟思惟とと一致するかの証明を与えるのであってさらに私（ゴットル）が自覚するならばいかにしてこの新しい態度の理論が本来、建設されるべきであるかという教訓的な意味をもった証明がさらにそれに加わるのである。

5. 前記理論の展望について

このような理論は根本問題から確固として出発することによって古い素朴な観点においては不可能であったものをなしとげることができる。なぜならば素朴な観点においては、理論がなお日常的思惟の桎梏をうけることになる。しかもこの日常たるや今日のわれわれをかこむ経済の日常なのである。従ってあらゆる機能論的思惟は、たとえカールメンガーあるいはカールマルクスあるいはいかなる人がそれを行うにしても、いうならば〝営利経済的〟に着色されているのである。しかし、真に〝不変なもの〟として、あらゆる経済に存続するものに体系的な自覚への道は開かれたのであるが、それがいかなる形態の経済であるにしても、換言するならば〝資本主義的〟〝都市経済的〟〝社会主義的〟等々の形態であるにしても、常に当該時代と当該国民その他の共同生活形態および集団と共同体の諸形態とは交互的に制約の状態にたつのである。従っていうならばたえず他の形態をとって生のびて、現実の経済に〝生長した〟。経済に〝化身〟するところのあらゆる経済の〝理念〟を獲得することが重要である。もちろんあらゆる経済はその形態からいうならば生成したものであり、またたえず生成するものである。しからばいかにしてこの自覚が体系的に行われるであろうか。私（ゴットル）は規則正しく、ま

たさらにより一層根本的な問題を解き明かし、かつまた、その解決を追求することによって、これを根本問題から密接な連関を保ちながら、常に理性的に自明なものへの形跡をたどろうと工夫するものである。その際事実上、既知のものの認識に当っては、理論の基礎にどうしても必要であるところの直接に判明なもののみが現われるのであるがこの場合、私（ゴットル）は第2として意識的に共同生活のあらゆる形態を度外視する、これは捨象するということである。なぜならば捨象しなければこれらのものは、人間の共同生活が明白に欲求と調達との持続的調和の精神によって構成される姿を混雑せしめるかも知れないからである。私（ゴットル）はあらゆる経済の不変という内容を探しだすことであろう。現実の経済は常に場所と時間との規定をもつものであって、経済はただ現実的にのみ考えられるとはいうものの、このような不変の根本内容は理性の必然から常に妥当しなければならないところのあらゆるものを包含する。すべての経済のこのようなただ単なる理性的構造はあきらかに超時間的な〝真〟に妥当するものであるから、私（ゴットル）はそれを〝永遠なる経済〟という語で表明する。

このことは〝漸減的な孤立化的抽象〟とはなんらの関係もないのであって、これは事実上漸増的仮設的抽象、すなわち、註の累積の増加であるから、ただちに私（ゴットル）は最初の段階から現実の面にぶつかることにしている。もちろんそれは数学の変質した現論であるところの某々の〝純粋経済学〟ともなんらの関係もないことである。さらには非常に好まれたところのロビンソンへの逃避もそれにかわることは不当であると信ずる。ロビンソン様を人間の共同生活に引用しうべき場合ではない。かれはあきらかに共同生活の相続者として…精神的物質的継承者としてのみ孤立を保つものであるにすぎない。かれは共同生活から飛散した破片である。かれは共同生活の解体の後における偶然的な最後の一人である。…航海と破船の途中に行われるがごとき解体後の…かれは共同生活の建設に対しては本源的な統一体たる意味を有しない共同生活の〝構成要素〟以上のなにものでもない。私（ゴットル）はかれにもなんらかの経済を認めうるが、それは畸形的なものであり、経済の慢画ということができる。なぜならばここにはわれわれの科学の対象である事実の本質的内容、たとえば決定的なすぐれた支配性を有する事態が脱略されるからである。もちろんこのような畸形的な経済も現実的なものとしては少くとも包括される。が、この点こそここでは重要なことである。ロビンソン物語は共同生活のあらゆる形態を表象することによってえられた抽象名詞を意味するのではなくて、粗雑でかつ明瞭に共同生活から投げだされた具体名詞である。しかしこれがために非常に曖昧である。故に私（ゴットル）は簡単にロビンソンから経済の理念を展開することは許されないと説くのであって、われわれはむしろロビンソンをそのままに…子供部屋に…放置しておこう。われわれの理論はそこから脱すべきである。

かくして最初の更新として理性的にえられるところのものは純粋な〝事実に先立つ理論〟という意味を有するのである。それは理性的に日常の経験を基礎に構成される。それは経済に関する万人共通の知識である。このような基礎なしにもろもろの連関が理性の必然からのみでは

解明されない。この日常の経験の基礎の上に財貨論の理論的体系も意識的にせよ無意識的にせよ例外なくたっている。…がこの体系も事実探求の成果をまったく見逃がそうとはしないのである。ところでこれらの体系にも、しばしば不可避の〝根本概念の章〟の前後にさしはさまれるところのあの〝経済段階の理論〟は必ずしも満足を与えてはいない。従って実際上には根本的な問題からよりは広範な問題へ理論をすすめるに当って、ますます増加していくところのあの無数の成果を入れられるだけ体系につめこむことである。かくして日常の経験は雑然と科学的に獲得された経験、すなわち事実探求と混合されて、遂には本当に経験の混ぜものが体系に流れこむことによって、そっくり理論の〝寄せ〟ができ上るのである。ここにおいて截然たる欠別が要求される。そしてあの厳密な〝事実に先立つ理論〟はこれを可能ならしめるのである。それは経済の基礎論を開拓する。精神的道具たるその助けによって、事実探求の成果は厳密に理論的に加工されて、あらゆる経験の予備的な仕ごとは明白に〝事実を基礎にした理論のために、はじめて完全に理論に利用されるのである。これが第2の更新であってこれと共に不変なものに関する理論が体系的経済〝形態論〟という可変なものに関する理論に対立されるのである。ここでは状況、交通、生計、法律、目的、信念等の諸形態の系列をつくることが必要であろう。しかしながらそれは内容的に秩序ずけられた系列であって、決して発展系列ではない。これに基いて内的に同種の諸形態もみいだしうる…各々の〝経済秩序〟に理想型的に属しているあの形態の復合体がみいだされる。あらゆる生成した経済はある一定の〝経済体制〟を指示するものであって、これはそれ自身、さらに一定の〝経済秩序〟の支配によって特徴ずけられるのである。

しかしこれらのすべてはなお空想であっていつ科学がこのような国民経済学的理論の体系の〝完全〟な建設をおこなうところまでに発達するかということは何人にもわからない。まさに第一歩のみがさし当って可能である。私（ゴットル）はこれをさらにこえて是非にかかわらずどうにかやってゆかなければならないだろう。何故ならばこのような理論の高度の完成は理論と経験との活発な相互作用をほこって始めて可能なことだからである。すなわち理論は経験にたえず形態論と構成論のよりすすんだ完成が解明しなければならない問題を提起することによってはじめて可能だからである。このことは正しい研究の継続の中におそらく数世代を通じて実現される課題である。早熟な体系の時代は、従って徹底的にすぎたということができる。従って国民経済学はまた理論の部分に関しても、そのもろもろの教科書が代表するような科学であるということができる。考えてみれる長期の手形のみがここでは振出されるのであるが、認識という生々しい鋳貨の形における現金払の確乎たる見込みがあるからである。二つの成果は保証されるのであって、第一にあらゆる現実の経済、さらには考えうるのみの経済からも〝全経済論〟の精神においてそのもっとも奥の本質をかぎだすべき鍵がみいだされるであろうこと。第二にここでは思惟過程ならびに、その問題を自覚した点において、はなはだ〝精練された〟思惟がおこなわれる。非常に精練されているが故に、前以って分裂され救うべからざるよ

うになることのない思惟が行われることである。なぜならば曖昧な言葉に対して正しい概念と公理を見出そうとすることは不要であるからであって、このことは必然的に理論家同志を葛藤にかることになる。それは究極において異った信念に基ずくという理由からだけでも解決はできない。たえず議論はなされなければならないから、われわれの場合もまず問題に関して、次には、その解決について論議されるべきである。しかしこの議論は効果的なものであって、必然的に諸々の意見の調和を促進するのである。ここではじめてたえず一般的承認という極限価値に接近する理論が魅力を感ぜしめるのである。

おわりに

真先に思い出すことは、学友鮮干炅君のことである。美濃部亮吉博士（現教育大教授）南謹吾教授（死亡）阿部勇教授（死亡）の諸先生が獄舎に去られ、高木友三郎博士（現日大教授）が当時、いま3ケ年間経済学を学ぶ学徒にとっては、現実経験によって10ケ年間経済学を学んだ人々に匹敵するであろうと説かれたことを想起するのであるが、この頃、鮮干炅君等と共に平野常治博士（現法大教授）岸本誠二郎博士（現京都大教授）渡辺佐平博士（現法大教授）の諸先生方から、親しく御教導いただいたのであるが、われわれは第1回臨徴として学窓から戦場にかりだされ鮮干炅君とも音信不通となってしまったのである。風聞するところによれば、京城（ソウル）の大学に健在とのこと。あるいは別人かも知れない。ゴットルの経済生活とその理論については、同君に負うところが多い。

その後ふとしたご縁から、戦後ふたたび渡辺佐平博士に弟子入りして、先生を悩ましていたのであるが、家政学という未知の学問にたずさわろうとは、夢想だにしなかったことであったので、あわてて、本学設立に際し、大変お世話頂いた大先輩の多田基教授を通じて、家政学会の重鎮である、辻村みちよ博士（現実践女子大教授）山本キク教授（大妻大子大）氏家寿子教授（日本女子大）戸野村操教授（日本女子大）の諸先生方の門を叩いて教えを請うたのである。考えてみると、人々からホルモンの充満した空気を呼吸することができて、君はええわ、長生きするよ、と祝福？されたことがまちがいであることに気付いたのである。ということは家政学という学問は、わが国にあっては、古くは徳川時代から現代に至るまで、あるいはイギリスやアメリカにおいても、諸先生方によっていろいろと研究されながら、いまだ体系ずけられていない学問であるそのものに携わる運命を背負うたことは、長生きできるなどという生易しいものではない、ということを悟ったのである。しかし幸いしたことは、渡辺佐平博士が戦後2回目の1ケ年有余に渡るロンドンを中心にした欧州各地の外遊からこの程帰朝されて、家政学に関する新しい書籍のお土産を頂いたことである。このことは暗中模索であったというような失礼ないい分ではなく、仕ごとに意欲をもったということである。最後に本原稿を整理清書して下さった学友村尾勇之修士に深く感謝いたします。

経済学にはセイの法則などいろいろな法則が認められているが家政学にはそれを体系づける法則に乏しい。

本論文では V.F. Gttl の思想を引用して家政学の体系方法論の一助としたい。

家政学は新しい "Anthropologie" の立場から概念的思惟の方法によって体系づけられるべきである。

In domestic science laws for its systematization are not so available as in political economics in which are recognized many such laws as theorized by T.B.Say.Gottl's proposition is introduced, in this paper, with a view to studying domestic science more theoretically. The Author's emphasis is placed upon the assertion that domestic science should be more systematized by conceptional speculation from the point of view of "Anthroplogie".

引　用　文　献

近代経済学の群像	日経新書	都留重人著	11～14 P
家政学原論	光生館	山本キク著	1 P
商業経済辞典	日本評論社		374 P 487 P 724 P
経済学小辞典	岩波書店		220 P 342 P 584 P